

✿ 退職者のひとこと

想ひ出

私が入所した頃、平城宮跡の大極殿に象徴的な1本の松が生えていた。草が覆い茂り平城宮跡は廃墟そのものであったが、雨の日も風の日も1本の松は踏ん張っていたのを覚えている。

私が研究所に入った翌年、ピーナッツで有名なロッキード事件が起こった。日本は高度経済成長期を迎え、発掘調査件数は毎年増加した時代である。その頃は、文化財関係者も増加の一途をたどった。発掘調査から保存処理まで、すべてが元気な日々を過ごしていた。前に進むことしか考えていなかった。大晦日、正月も研究所で仕事を続ける年もあった。かつては、西大寺周辺には何もなくて静かだった。今のようなジャスコや百貨店、銀行などなかった。その後、次々とビルが建設され、今では昔の面影はない。

昭和が終わり、平成の時代を迎えて、日本は徐々に失速してゆくのが感じた。そのような中で阪神・淡路大震災が起こった。文化財と防災について深く考えさせられた事件であった。

定年退官数年前に、思いがけない重大な仕事が飛び込んできた。高松塚古墳の石室解体である。最後の大きな仕事として一生忘れないだろう。

物質の劣化は一方向にしか進まない。可逆的な反応ではない。人間でも個人差はあっても、二十歳を過ぎると劣化は、一段と進むと言われている。可能な時と適切な処置によってのみ、劣化を遅らせることができる。時期を逃すと、劣化のスピードを抑制することは不可能である。

現在、平城遷都1300年祭に向けて準備が進められている。通勤電車の窓から日々変わりゆく姿を見ている。30数年前にこの姿は想像できなかった。

(副所長 肥塚 隆保)



副所長室にて